

氏名	ホウ ジョウ ミカヨ 北 條 美香代		
学位の種類	博 士 (音 楽)		
学位記番号	博 音 第 142 号		
学位授与年月日	平 成 21 年 3 月 25 日		
学位論文等題目	〈論文〉テキストと音楽との協働－アルバン・ベルクの作品を例に－		
論文等審査委員			
(総合主査)	東京芸術大学	教 授 (音楽学部)	川 井 學
(作品審査主査)	〃	〃 ( 〃 )	川 井 學
(作品審査副査)	〃	〃 ( 〃 )	浦 田 健次郎
( 〃 )	〃	〃 ( 〃 )	尾 高 惇 忠
(論文審査主査)	〃	〃 ( 〃 )	川 井 學
(論文審査副査)	〃	〃 ( 〃 )	浦 田 健次郎
( 〃 )	〃	〃 ( 〃 )	檜 山 哲 彦
( 〃 )	〃	〃 ( 〃 )	片 山 千佳子

(論文内容の要旨)

テキスト－詩や文学作品－と音楽は、各々が独立した芸術作品であり、個々で十分にある確立された表現を獲得し得るものである。それにもかかわらず、両者を結びつけるという大変な困難を伴う試みは、歴史上あらゆる作曲家によってなされてきた。それは、この二つが組み合わせられた時、実現される効果に魅力があるからにはほかならない。音楽がテキストを受容し、テキストが音楽を呼び込むことによるのみそれは実現されるのであるが、二つの芸術は統合されることによって協働し、各々の限界を超え、より高次の表現を獲得するのである。それぞれでは成しえない境地に達する。双方は単に補強されるのではなく、協働することによってそれ以上の意味を持つのである。

過去の作曲家はどのような詩の解釈を行い、その解釈を自らの音楽語法の中で実現させていったのであろうか？完成された音楽の音楽構造とテキストとの関係から作曲者によるテキスト解釈を読みとり、それによってどのように協働が成立しているのか、ということ考察する。そうすることでテキストを伴った音楽作品を創作する際の、ある一つの形を提示する。

本論文では、アルバン・ベルクの声楽作品の中から、ベルクにとって初めてのオーケストラ作品である、《ペーター・アルテンベルクの絵葉書のテキストによる5つの管弦楽付歌曲 Fünf Orchesterlieder nach Ansichtskartentexten von Peter Altenberg》(Op.4)－一般的に《アルテンベルク歌曲集》と呼ばれる－を取り上げ、テキストと音楽との協働がどのように成り立っているのか、ということ考察する。アルバン・ベルクがその生涯に残した作品数は決して多いとは言えないが、その中で、《オペラ ヴォツェック Wozzeck》(Op.7)に代表されるように、テキストを伴った音楽作品の割合は高い。このことから、ベルクの歌曲作品、声を伴った作品への愛着が推察される。ベルクは素晴らしい蔵書に恵まれ幼少から文学作品に傾倒したこともあり、優れた審美眼を持っていた。その審美眼はテキストの選択や解釈に遺憾なく発揮された。テキストを伴った作品へ意識を持って取り組んでいた作曲家の作品の音楽構造を見る事でその協働過程を明らかにする。

第1章では、アルバン・ベルクの声楽作品について概要を論じ、《アルテンベルク歌曲集》についてのテキスト考察を行う。《アルテンベルク歌曲集》に用いられている五編の詩は、詩人ペーター・アルテンベルクによって書かれた詩であるが、それは印象主義文学、すなわち「対象の細部すべてを網羅的に描

くのではなく、目立つ特徴のみをとらえて強調し他は暗示に委ねる」性格を持つテキストである。韻律法から考察しても、第3曲に用いられた詩を除き、統一感のない散文的な詩であることが読み取れた。

第2章では、第1章をふまえ、音構造から詩にアプローチする。《アルテンベルク歌曲集》はパッサカリアの形式で書かれた第5曲に作品全体が収斂していくように書かれており、作品は緻密な動機の構築により成り立っている。ベルクの音楽によって、印象主義文学の詩に整合性がもたらされる過程を具体的に細部まで明らかにする。

第3章では、第2章をふまえた上でテキストと音楽との協働成立について考察する。

#### (博士論文審査結果の要旨)

綿密を旨とした観察と記述の努力は窺われるものの、対象作品（A・ベルクのop.4）の音構造の分析とP・アルテンベルクによるテキストの解析は必ずしも噛み合っておらず、意図された音楽（の論理）とテキスト（のプロットや主題性）との「協働」の解明が十全になされたとは言いがたい。しかしそれは、創造における素材ないし契機の解釈とリアライズという、すぐれて個別的な営為の客観的な解析と記述が本来的に不可能であることによるとも言えるのであり、申請者があえてこの困難な作業に挑んだのは、時に牽強付会に陥ることをも恐れずに論理の構築を試みることによって、「協働」が生成する「現場」の眺望を得ようとする実作者らしい企図に基づくものであったと考えたい。

とは言え、ともかくも特定のテキストと音楽との「協働」の様相を探ろうとするのなら、まず、音楽の本来的な属性である原理的・一般的（普遍的）秩序と作品固有の秩序とが的確に読み分けられ、さらにその固有性とテキスト解釈の固有性との関係が明らかにされる必要がある筈だが、本論文ではそれらの解析と仕分けが十分になされているとは言いがたい。また、解析の視点が限られ、相互作用についての考察に望まれる多角性を欠いているが、それはひとつには、ベルクの複数の作品を異なる方法によって解析し、その差異を超えて一貫する特性を見いだすことによって考察の客観化と深化を図った当初の計画を縮小して単一の作品のみを対象とせざるを得なかったことにも起因していると思われる。

本研究を端緒として、今後も創作と関連させた継続的な考察が重ねられ、より深い見識が獲得されること、それが、申請者の表現の可能性の拡張につながることを期待したい。

#### (作品審査結果の要旨)

審査の対象となった2005年から2007年までの三年にわたって書かれた四つの声楽作品はいずれも、申請者の人間的・音楽的な資質や姿勢・信条を反映して、技術上の新機軸や表現の意外性を追い求めるよりも、一貫した技法や語法の深化を図る堅実で奇をてらうことのない正統的なアプローチと地道で持続的な努力を窺わせるものである。

研究テーマ（「テキストと音楽との協働」）を意識してテキスト解釈の客観化に過度に腐心したためか、やや平板で無難な表現にとどまる箇所が散見されること、特に音楽的持続における時間の質の制御に関するより多様な的確な技法の獲得や音楽的語彙の拡張が望まれることなど、いくつかの惜しまれる、あるいは未だしと思われる点を残してはいるが、いずれの作品もテキストとの真摯な取り組みと工夫の跡を読みとることができ、また、作品ごとに着実な進境を示しており、一貫して「ことば」を取り入れた創作活動を自覚的・継続的に展開してきた申請者のこのジャンルにおける今後の進展を期待させるものと言えよう。